

戦前北海道における生活綴方運動について (1980年筆 未定稿)

日本生活教育連盟常任委員
日本教職員組合研究協力者
日本教職員組合第二次教育制度検討委員会専門調査委員
埼玉大学教育学部助教授

川口 幸宏

1. その概観と特徴

戦前に、各地で活発に展開された生活綴方運動の中で、北海道のそれほどのような特色を持っているのだろうか。

北海道生活綴方運動史はいまだ体系的に評価されてはいないといつてよい。近年、道内の綴方サークルなどに所属する青年教師の意欲的な掘り起こしが行われ、いくつかの成果が見られるが（たとえば、小鮎寛『北見文選』の掘り起こしを佐藤将寛が、横山真を飯倉定賢が）、それらはいずれも偶然的・単発的なものであって、一定の方法論と目的論に従っての歴史評価（「遺産」継承の今日的意義を定めての評価）には到達していない。貴重な先駆的労作ではあるが、さらに継承・発展されなければならない。その点で、小田切正は、北海道教育運動史という視点から道民教機関誌『民教』誌上で、あるいはその著『戦時下北方美術教育運動』（鳩の森書房）で一定の成果を示してきている。佐藤・横山・小田切のこのような仕事の成果によって、私たちは、戦前の北海道における生活綴方運動のおおよその実態とその特徴を見ることができる。が、なんととっても、高田富与の『綴方連盟事件』にかかわる弁護書類の公刊が、研究を大きく切り開いてきているといつてよい。しかし、それと同時に指摘できるのは、高田以降、前述のような道内の志ある人々を中心とした掘り起こしの評価がなされている程度で、全国的な視野での研究がほとんど進んでいない一わずかに「生活教育論争」の舞台装置としては全国的に着目される程度である。だから運動の全体像と特徴については、研究の余地が多に残されているという状況である。

『北海道教育史』第2巻によれば、道内の大正期から昭和初期にかけての綴方教育は、全国的な動向を受けて、写生主義、芸術主義、随意選題、生活（修身）主義などの論がさまざまに展開されたという。当初は師範附属の教師が指導的立場から発表しているが、やがて多くの公立小学校から「綴方教師」と呼ばれる人たちが登場してくる。これらの状況も全国的動向と機を一にしている。初期の「綴方教師」では、木村文助（亀田郡大野小）、本多熊太郎（爾志郡突付小）、斉藤七郎治（余市町大川小）などが優れた実践を残している。木村は、全国的にも綴方教師の先輩として名を知られ、その著『村の綴り方』（昭和4年）、

『悩みの修身』(昭和7年)などは強い影響を与えた。「生活綴方の先駆者・木村文助」(小田切正)とされるように、すでに大正期から生活綴方を切り開いている(小田切正『民教』誌の論文「生活綴方の先駆者・木村文助」、川口幸宏『生活綴方研究』(白石書店)。また本多は「綴方の行者」(岩城定二)と評され、とりわけその文集『お日さま』の指導は、後の生活綴方教師の情熱と比しても劣ることはないだろう。齊藤には、文集『からまつ』などの指導があるが、かれは、よき先輩として生活綴方教師たちと手を携えて、綴方教育の道を歩んでいる。

ところで、北海道は、その広大な土地と、主としてその開拓によってきたということから「小作争議は起こりえない」などと言われるほどであるが、事實は第一次世界大戦以降、急速に階層分化が進んできている。『北海道教育史』によっても、たとえば明治44年の自作・小作・自小作の比がそれぞれ44.3%、41.8%、13.9%であったのに対し、大正15年になるとそれぞれ、35.3%、49.1%、15.6%となっている。そして小作争議は大正15年から急激に増え、それは昭和11年には頂点となる。同書によれば『小作争議の頻発とともに、児童の欠食や子女の売買が目立って増えてきた。移民の招集を必要とする北海道から道外各地へ女給、女工として売られていき、街には、都市で失業し、帰農するにも土地もない、食料すら満足にあてがわれることのない二男坊以下の青年・成年の「ルンペンが氾濫」していた。あるいは海や炭鉱などの労働者をめぐる過酷な労働条件は、多喜二の小説のモチーフになったりしていることなどによって伺い知ることができる。北海道として昭和初期の「激流」に流されていたのである。

こうした現実には、子どもにも悲惨な現実生活を強いていたし、多くの良心的な教師は、そういう現実と直面して、自らの弁当を欠食児童に分け与えるというだけのヒューマニズムに限界をさえ感じるようになっていく。かれらには、公教育の内容と方法が、こうした現実に耐えうる、そして児童に「生き抜く力」を与えうるものとは感じられなかった。したがって、かれらはそこに何とか食いこむ内容と方法の創造を求めている。進歩的な科学に触れていた青年教師や青年ジャーナリストとして、綴方を教育方法にした、現実生活のなかから意欲と科学を学ばせる教育のあり方が提唱され、それをうけて各地で実践の俎上に乗せるべくさまざまに取り組みされていた。坂本亀松(亮、亮人などとも称した)、小鮎寛、藤原行孝などは、自らが文学好きということもあって、それらの考え方に共鳴、『教育・国語教育』『綴方生活』『綴方教育』などといった中央ジャーナリズムと積極的に結びつき、各地の綴方教師たちと接触、実践の交流・相互批判を活発に行った。

そうした実践・運動・研究の過程で、坂本らは、綴方教育を「生活や思想の文章による表現」というような抽象的な規定にあきたらず、たとえば、昭和7年の価格指数が昭和4年の5分の1以下というような地域ならば、そのような地域の特性に規定された「生活の表現」でなければならないし、そういう地域での「生活」のあり方の指導でなければならないと考えるようになった。かれらは、東北地帯の教師たちが連帯し、「北日本国語教育連盟」を結成した(昭和9年)のに刺激されて、「北海道綴方教育連盟」を組織した。坂本亮人は「所謂、『北方の指導者群』のめざましい実践は、この意味からとてもよい鞭となつて私たちに加へられた。全国の綴方人は等しく立ち上がつて、それぞれの郷土的特質をかうした意欲的な方向に採りあげて見る必要がある」と述べているが(「教室に於ける二つの傾向群」、『綴方生活』第7巻第9号。傍点、引用者)、綴方教育連盟は、「郷土的特質」を「北海道性」という用語で示そうとした。すなわち、かれらは「綴方生活台としての北海道性」と規定した。「北海道性」とは、(1)開拓の政治機構と道民の生活機構との緊密性、(2)道民としての生活伝統が浅い、(3)文化に対して吸収性と働性に富む、(4)文化の移行性と浸潤性、(5)地域的懸隔性とその生活特性、(6)生産機構の特殊性、(7)自然環境の特殊相、という「輪郭的規定」(坂本亮)によって示されている。

連盟の結成は、昭和10年8月。同年の2月頃から結成の気運が高まり(坂本、函館・小笠原文次郎、旭川・小坂佐久馬、北見・小鮎寛)、6月には発起同人(9名)結成、7月に30名の連盟員が確定し、8月発足となった。結成当日は、主として地理的な事情で17名の同人しか集まらなかったが、「二日間の同人協議会は強い緊張と意欲に終始」し、具体的な仕事として、(1)同人の発表機関誌、季刊『綴方林』の刊行(2号まで。機関誌廃刊後、機関誌『同人通信』を20数号発行した)、(2)『北海道文選』を各月発行(20数号発刊)、(3)毎年8月同人協議会開催、(4)講習会開催、(5)研究協議会開催、(6)道外の綴方研究会、協議会などに代表派遣、などを決めた。ちなみに(4)、(5)の講習会・研究座談会には、国分一太郎、水野静夫、野村芳兵衛、戸塚廉、城戸幡太郎、留岡清男などが来道し(昭和11年、13年など)、「生活教育論争」の大きな舞台となっている。これについては紙幅の関係から別稿に示したい(*別稿、見いだせず)。が、端的に示しておくならば、坂本・小鮎などに代表されるように、「綴方による生活教育」をきまじめに実践・研究をしているが、戸塚や留岡らの教科構造を含めての教育改革を「生活教育」の課題としていた論者から見れば、綴方を進めるといのが教室に「閉じこもつての」生活教育のあり方に不満を覚えたのであろう。有名な、留岡の「観賞に始まり感傷に終わる」という言葉を引き出している。むろん、連盟同人内に

も寺岡一郎のように、綴方科＝表現技術指導教科と捉える者もいるので、連盟自体に統一した生活綴方観があったわけではない。だが、連盟同人たちは、まじめな実践を踏み台にして、生活綴方を構築べく交流しあい、論争しあっていた。留岡らは、そういう実践の成果をきちんと見て評価したのか。わたくしは当時の留岡らの教育実践観を洗い直す必要があると考えている。坂本らは、留岡らの批判を真摯に受け止めながらも、「綴方による生活教育」についての確信をさらに強めて実践を深めている。そしてかれらは、教育科学研究会の運動にも理解を示し、支部を結成してゆくのである。

さて、連盟は、地域懸隔のこともあって、5ブロックに分けられた。「連盟自体の仕事を運転するには、どうしてもブロックの強化を目論まれなければならぬ。このブロックが主体となり、綴方文化運動のよい普及が実験化する方向—(垂直的方向)」という意図が込められている。5ブロックとは、南部（函館、責任者・小笠原文次郎）、西部（札幌、吉岡一郎）、中部（旭川、小坂佐久馬）、北部（網走、小鮎寛）、東部（釧路、坂本亮）のことである。それぞれのブロックがどのような活動をしたのかは不詳である。ただ、このブロックにおいては、それぞれの同人が個人であるいは組織で綴方実践・研究を展開した。個人の活動（文集その他）については別表に資してあるが不十分な点が多いので、今後完成してゆく所存である（*「別表」は所在不明である）。

連盟は、それ自体の活動もさることながら「連盟の単位としての個人又はブロックに対する批判と協力（水平的方向）」をきわめて重視した。それらの活動として、大きな仕事を成したものに、(1) 北見教育会綴方研究部（小鮎寛代表）が知られている。児童文選『北見文選』は地域文集であるが、こうした官製教育会を母胎とした生活綴方運動は、他に、たとえば三重県多気郡第二部教育会、静岡県駿東郡教育会などがある。これらは各校綴方主任たちがリーダーとなって、地域の「生活」を重視した綴方教育のあり方を考え、全国の綴方教師たちと交流をし、生活綴方実践を深めていった。『北見文選』は、そのために、教師用書を発刊し、地域の教育文化運動の発展に寄与するものであるが、こうした運動のあり方について、とりわけその実態と本質についての研究はまったくといっていいほど、進められていない。その点、『北見文選』の活動は、貴重な遺産を残してくれているので、今後の発掘・研究に期待したい。また、函館地方では、南方北海道綴方教育研究会が、小笠原文次郎、藤原行孝らを中心に結成された。これはおそらく自主的な組織であろうと推察しているが、機関誌『綴り方指導を如何にすべきか』（現在、創刊号＜昭和13年9月＞のみ発掘）。こういった類の自主的な研究会は、調査を深めれば、まだいくつも発掘されるだ

ろう。記録によれば、綴方夜話会、北方綴方の会などが現れている。今後の大きな課題である。

生活綴方教師は、文集にその実践の成果を残した。木村文助の『村の子供』は初期のものとして全国的に影響を与えているが、坂本亮『日向』『ひなた』、藤原行孝『赤い夕日』、横山真『ぶしの芽』などは著名な綴方人によって推奨された。とりわけ『ひなた』は、峰地光重によって、子どもの集団作成になる文集としては、日本一という折り紙が貼られ、『工程』誌上で、その製作過程も含めて、大きくとりあげられた。こうした生活綴方の命である文集活動への研究を進めていくことは、大きな課題である。それは、綴方教師の生活観、児童観、教育観（発達観）の実態を示すからである。

連盟に集う教師 55 名が 1940 年～41 年に弾圧された。このことについては別稿にて。

(未完)